

アンソロジー
anthology

ね む
合 歡

Vol. 16



2016 夏

目次

雲流れ……………	石井宏幸……………	4
初夏へと……………	井上悦男……………	6
春の光……………	植田桂之……………	8
あれから十年……		
……	梅田光憲……………	10
蛍火……………	大戸 稔……………	12
海外吟……………	尾形松子……………	14
万緑……………	桜本滋子……………	16
半仙戯……………	角南房子……………	18
夏から秋へ……………	高城登代……………	20
「五の日句会」より		
……	富阪宏己……………	22
若葉風……………	鳥越 替……………	24
巡……………	長尾京子……………	26
卯浪寄す……………	信里由美子……………	28

万緑……………	蓮岡健美……………	30
風光る……………	三宅 進……………	32
健康に感謝……………	與田武彦……………	34
夜の秋……………	米元ひとみ……………	36
明易し……………	渡辺牛二……………	38
~~~~~		
編集後記……………	渡辺牛二……………	40

# 雲流れ

石井宏幸

雲 流れ 夕 風 流れ 苗 木 市  
薄 氷 に 載 り た る 空 の 漂 へ る  
灯 と も し て 膝 や は ら か く 雛 と 居 り  
春 水 の 襞 を 探 つ て 独 り 釣 る

ほ む ら と も 見 え て 椿 の 落 ち に け り  
観 潮 の 空 を 引 つ 張 り 込 む 奈 落  
雉 啼 け ば 野 の 果 て と し て 折 り 返 す  
芽 柳 の 空 傾 け て 靡 き け り  
紙 風 船 少 し 遅 れ て 弾 み け り  
水 蹴 た て 空 を 蹴 た て て 濁 り 鮒

---

前号で二男に俳句を伝えて  
いることを書かせていた  
たが、細々とだが続けている。  
地元の俳誌「旭川」の春秋集  
への投句も続けてもらって  
いる。しかし、未だに一人で  
発句には俳句を作るところに  
まではないかない。辛抱強く、  
俳句の楽しさに触れてもら  
うほかはないのだろう。  
その中で、一緒に吟行して  
感じるの、初心としての物  
を見る目の素直さだ。いつの  
間にか、俳句らしい表現にと  
らわれていた自分に気づかさ  
れることも多い。

---

# 初夏へと

井上悦男

鈴蘭や少女は長き足を折り  
落椿より雨水のこぼれけり  
風呂敷のむすび目ゆるく桜餅  
菓子折の中の小さき五月かな  
さよならは食べてからです柏餅  
昨日よりいろ艶やかに柿若葉  
藤の花ゆれて通すや朝の風  
寡黙なる若葉の雨でありにけり  
庭若葉どの一枚も伸び盛り  
濃淡を付けて緑のかげ生るる

# 春の光

植田桂之

冴ゆる夜の音のいろいろする厨  
懐に名刹を抱き山眠る  
街をゆく軽き靴音春近し  
海峡を春の光の流れけり  
春光の水尾引いてゆく渡し舟  
光る風光る水脈引く瀬戸の海  
野のうらら幼児よちよち歩きをり  
鯉幟一竿だけの郷里かな  
かげろへる線路を電車揺れて来る  
棚田はや青田風へと変はりけり

# あれから十年・・・

梅田光憲

蹴り揚げしサッカーボール春の月  
ででむしの嬰兒といふうすみどり  
松手入する擬声語と擬態語と  
音の中飛沫の中に滝の棒

古希未だ青春なりし初山河  
四阿にゐて夕立の籠の中  
雲海や景かくしゐて景をなす  
若者の乾きし会話麦の秋  
蛇の目の視野に死角のなかりけり  
寒波来る島々は灯を繋ぎ合ひ

---

句集「アンソロジー合歓」  
に、今まで活字となっていない句を、各年に一句づつ選び、  
今号の十句とさせていただきます。

なんだか、昭和の流行歌の  
様なタイトルになりました  
が、お許しの程。

タイトルを付けるのと同じ  
くらい苦手な夏が来ましたが、  
何とかがんばって俳句は  
続けてゆくつもりです。

今後とも皆様4649!!  
お願い致します。

歩きたき者だけ歩く日の盛  
光憲

---

# 螢火

大戸 稔

病棟に暖房グレン走り初む  
大山の雪の匂ひを風降ろす  
花散れど戻らぬ齡寂しまず  
十種余の免許用なし花八手  
花は葉に今も毅然と廃校舎  
今は居ぬ鮎や豊漁の昔恋ふ  
神の池の途絶へ哀しき残り鴨  
無職てふ言葉に厭るや八十の梅雨  
新橋にともる昼の灯梅雨繁し  
螢火や新橋裾に閉づ渡舟

# 海外吟

尾形松子

「嵐が丘」ロケ地やヒース花ざかり  
空路来て嵐が丘の花野風  
宮殿の赤き衛兵日の盛  
朝涼や人沸き出でて太極拳

今回は、海外吟を取り上げてみたいと思います。  
数十年前、アイルランドにてホームステイを体験した折の句。まだ俳句との出会いのない時でしたので思い出している句二句、ロンドン一句、香港二句、カナダ一句、いちばん最近の句がベトナム旅行の時のものです。  
雑詠は多々ありますが、活字として残せる句の少ないことが悩みです。  
今年は春頃より体調を崩していて、ひとり吟行、仲間とのスケッチを楽しむ余裕もな

氷売る太極拳の手を休め  
美しき雪の結晶持ち帰る  
並木道椰子の葉影の涼しさよ  
椰子の実の目の前に落つ夏の旅  
炎昼の椰子の密林こぎ入りて  
どつときてぱつと止みけり男梅雨

く、なんとなく気力が出ない淋しい日々でした。  
健康管理に気を配り、訪れ来る夏を元気に過ごしたいと熱望しているこの頃です。



# 万緑

桜本滋子

万緑や雲ほくほくと浮びたる

万緑や法鼓こだまし揺れにけり

本殿の鎮まる雨の緑かな

万緑の蝦夷へ雲抜け着陸す

濃く淡く緑を重ね登校路

溪谷へ張り出す径緑なす

万緑を縫ひて開けし牧場かな

牛の道緑の中に刻まるる

万緑や長き吊橋たわみをり

万緑や故郷の山へ深呼吸

# 半仙戯

角南房子

頬杖の風の窓辺や鳥渡る  
水鳥の羽の温もり拾ひけり  
暁の張りつめてゐる寒さかな  
水道をフェリーがすべりゆく二日

公魚の煌めきながら釣られけり  
流れゆく雲の形や春愁  
漕ぐほどに風に近づく半仙戯  
小流れの日差しに揺るる蝌蚪の紐  
新しき風を素肌に変更  
昼顔や鄙びた町の美容室

# 夏から秋へ

高城登代

太刀音の消えて久しき端午かな  
離るる尾ピクと動いて蜥蜴逃ぐ

砦跡鎮めて紫紺花菖蒲

四万十の卯の花腐し岸辺り

あばれ梅雨付け争ひする馬に似て

畦豆に囲まれ二畝の畑かな

芙蓉咲く初老の紳士愛でて行く

色染まる荔枝の下がる保育園

近し人突然に逝き秋暮るる

怒りん坊齡八十秋の澄む

# 「五の日句会」より

富阪宏己

ふと肌になじみて春の雨らしく

初花と風の拮抗極まりて

初花を励ましてゐる日差かな

春光に引き上げられてゐる潮位

たそがれて妖怪めきてきし新樹

そよ風も夜風となるや五月闇

考古館てふ五月闇ありにけり

いさぎよくシャワーする子や夏来たる

梅雨らしき梅雨なり今日も雨が降る

草いきれ残して宵となりにけり

今回は五の日句会へ出句した句より、十句を出します。五の日句会とは、合歓の会の会員の有志によるネット句会です。

ネット句会とは、パソコン上の句会です。

みんなで同じところを歩き、句を作り、句会を開く吟行句会。月一回、句会を開き、一ヶ月に作った句を持ち寄り、持ち寄り句会。など、色々な句会がありますが、一堂に会することの出来ない人が、パソコン上で顔を合わずネット句会は、私のように病

気などで句会に参加しにくい者にとっては、ありがたい句会です。句会へ出句せねばならないので、とにかく句を作ることとは、私にとっていいことです。作句を休まなくしてみます。

合歓の会の会員でしたら、どなたでも構いません。ネット句会にお出ください。興味のある方は私までご連絡ください。

以上

# 若葉風

鳥越 禁

若葉蔭原爆ドームよりの風  
折鶴を捧ぐる児童若葉風  
青芝にへたりて子らの順を待つ  
薫風や朱塗り廻廊幾曲り  
若葉雨古刹へ長き磴登る  
鳥の声降りて新樹の上高地  
深々と新樹を映す梓川  
焼岳へ駆け登るごと若葉かな  
幹すくと見せて唐松若葉美し  
雪溪を裾曳き穂高岳聳ゆ

長尾京子

躍り出る地の定まりて名草の芽  
のどけしや飼犬の目の黒々と  
鳴き声と瞳ばかりの子猫かな  
筍の掘られゴロンと転げけり

あさばらけサクサクと切る夏野菜  
日輪に紛れ込みたる柿の花  
坪庭の泰山木の花ひらく  
吉備国の十方に梅雨戻りけり  
日輪とくる蝉の声たけなはに  
ぶんぶんの遠く近くと旋回す

# 卯浪寄す

信里由美子

春雨に触るる春雨昼しづか

春霖や雨の黙とは石の黙

ハンカチの花の一樹に森薄暑

千枚のハンカチの花春惜む

青芒風の軌跡の繋がりぬ

木洩日に置く貝殻と夏帽子

夏帽子かむれば沖は深き藍

白浪が海蒼くして卯浪来る

海^ナ底の藍せり上る卯浪かな

大卯浪沖の全長寄せ来る

# 万緑

蓮岡健美

初日の出真一文字に海照らす  
雲の端を山の端染めて冬日の出  
搔き混ざる寒の卵の音として  
水仙の土手白くして波打てる

梅真白花八分てふ重さかな  
みなちがふ時計の時間春うらら  
楽流れ刻の流るる春の雪  
ヒマラヤの空とも見ゆるブルーポピー  
老鶯に気迫ありけり雨の中  
枝弾き万緑登るバスの窓



# 風光る

三宅 進

開店を祝ふが如く春の雪  
子等の踏むペダルのリズム風光る  
我が家の厠に潜む余寒かな  
潔よし音立て落つる椿かな  
バス停に立つ身にそよぐ春の風  
冬うらら行手定めず歩むなり  
春霞瀬戸の小島を隠しけり  
郊外を流るる川に春来たる  
花の昼那岐山麓を前にして  
雨に濡れ色鮮やかな花みずき

# 健康に感謝

與田武彦

早いもの春着が似合ふ娘かな  
初氷庭の金魚は元氣かな  
待つ時間散歩に読書日向ぼこ  
老親やバレンタインで生き返る

青空に河津桜やめじろ二羽  
わらび餅抱へて行くや俳句会  
四国路の悟は遠き遍路かな  
金雀枝や昔よく見し帰り道  
庭掃除金魚喜ぶ餌をやり  
鳥潜り魚は飛ぶや夏の波

---

昨年末には大病で入院を経験しましたが、おかげさまで元氣になりました。健康のありがたさを実感しております。

毎日を大事にして、日記俳句も頑張りたいと思っております。

---

# 夜の秋

米元ひとみ

雨まじり初めたる茅花流しかな  
五月晴髪さらさらと風をゆく  
花ねむに目を閉ぢてをり六地藏  
洗はれて網戸の風の新しく

ががんぼの人嫌ひとも恋しとも  
はまゆふに水平線の端まろく  
ページ繰る音のひそやか夜の秋  
肌のきめ褒められてゐる生身魂  
夕月と我とのあひを鷺一羽  
波にまだ風のなごりや星月夜

# 明易し

渡辺牛二

明易し日毎に鳥の声かはり  
水音の語れど一人青田道  
蛇死してベルトのやうに道にある  
夏の霧窓よりすべり込む山路

古い句でお茶を濁そうと思つていたのですが、皆さまの力作揃いの句を読むうちに気が変わりました。  
一念発起、六月三十日の倉敷吟行での最新作十句です。  
句会場「あきさ亭」は本町、阿智神社の下あたりにあります。あきさ亭での句会は、昨年の八月からですから、もうすぐ一年になります。  
せつかくのお休みなのに手料理でもてなしてくれるメグちゃん、半分触られるのが迷惑そうな犬のニコちゃんが居ます。

珈琲の香にゆらぎけり夏暖簾  
鳥居より仰ぐ万緑阿智の杜  
番傘の干され社務所の梅雨晴間  
苔の岩ふれて涼しさもらひけり  
池の鯉モネの睡蓮つつきけり  
蚊の出ると思へば腕のかゆくなる

メグちゃんのお料理は四季の彩が豊かで素材が活きています。まさに句会にピッタリの料理、俳人好みと言えるでしょう。  
皆様も是非どうぞ。

## 編集後記

◆七月に入つての急激な温度上昇と湿気、いやあ、まいりました。編集後記を書くのも汗だくです。

◆前号で主宰から個人句集のお話があり、現在までに二冊を上梓することが出来ました。興味を持たれている方もあると思いますので少し書いておきます。

◆印刷用の版を作らず、パソコンのデータから直接印刷して製本します。その為少数部数での制作が可能で、費用も安く抑えられます。

◆部数は五部から可能です。

◆原稿はパソコンでも、紙に書いたものでも、私がお手伝いして本に仕上げます。

◆費用は内容によって変わりますが、書店で買う句集よりはるかに安

いです。

◆是非どうぞ。

◆さて、この頁が皆様の目に留まる頃には梅雨も明け、このたまらない湿気からは解放されていると思います。でも油断は禁物、暑さはこれからです。しっかりと休んでしっかりと水分を補給して、熱中症にならないようにご注意ください。アルコールは水分補給にはならないですよ。

◆私が主宰の句に触れる機会は定例の句会と五の目句会ですが、最近そのどちらでも主宰の勢いが止まりません。どうやら頭脳の部分は元通り回復されたようであれしく思っています。

◆今号も多くの力作をありがとうございます。

しつとりと犬のリードの梅雨湿り

(牛二)

## アンソロジー合歓 Vol.16

平成28年7月27日発行  
発行 合歓の会  
発行責任者 富阪宏己  
印刷 大友出版印刷  
大阪市生野区

連絡先  
〒701-0304  
岡山県都窪郡早島町早島 3991-144  
富阪宏己方

次号締め切り  
平成28年12月31日  
原稿送付先  
〒708-0015  
岡山県津山市神戸 719-7  
渡辺牛二

Email: info@nemunokai.net  
Tel. : 090-8710-7067